

カンパチの「共食い」について

本年度のカンパチ種苗生産については、8月までに終了し、結果としては約19,000尾の稚魚（全長：約56mm）を生産することが出来ました。今回初めてカンパチの種苗生産を経験してみて、今後大量生産を可能にしていかなければならないと実感しました。一つは日令10前後に起こる大量減耗、もう一つは「共食い」です。今回は、後者の「共食い」について述べてみたいと思います。

カンパチは、成長の個体差が激しく、全長4mm（日令6頃）には目で見て分かるほど差が付き始め、全長6mm（日令18頃）になると共食いが始まります。

カンパチの共食いはすさまじいもので、上から観察しているとあっちでパクリ、こっちでパクリ、向こうでパクリと次から次に小さい魚が大きい魚に食べられていきます。

ねらわれる方の成長の遅い小さい魚は、追いかけて回される事がストレスとなり、餌も十分に食べられないため、更に成長が遅くなります。かたや大きい魚は、共食いをすればするほど成長が早まりどんどん大型化していきます。小さい魚はより小さく、大きい魚はより大きくと悪循環が続き、個体差が大きくなるにつれ共食いも激しくなり、水槽内の魚はどんどん減少していきます。

さて、この共食いを防止するためにはどうすればいいのかというと、一番の方法は「選別」になります。大きさにより選別して、別々の水槽で飼育してやることにより、共食いを抑えることが出来ます。しかし、選別するにも魚体が小さいですから、直接網ですくったりは出来ませんので、水槽内にモジ網を設置し、夜間に仮眠状態になり浮遊している小

型群のみをサイホンで他の水槽に移す方法を取りました。

今回は、この選別方法により6mm前後（日令18頃）の初期の選別はうまく行うことが出来ました。しかし、ほっとするもつかの間、20mm（日令30頃）ぐらいまで成長してくると、また大型の群が小型の群を追いかけて回し出しました。このサイズになると、食べられるほどの個体差はなかなか無いので、共食いまではいかないのですが、それでも大型の魚は執拗に小型の魚を追いかけて回したりつつかいたりします。

弱った小型の魚1尾を大型の魚10尾ぐらいで追いかけている姿を見ると「共食い」と言うよりは「弱いものいじめ」といった感じがします。カンパチたちもやはり本能として、自分が生き残るためには、例え仲間であろうともそれを餌にしたり、多くの餌にあり付くために弱いものを蹴落としていこうとするものなのでしょう。

今回の生産試験でこのような自然の厳しさというか、生存競争の激しさを見せつけられたわけですが、今回の経験により選別に関しては、選別時期としては6mmサイズと20mmサイズの時期に一回ずつ。選別手法としては、夜間の仮眠状態時にモジ網とサイホンを用いた手法が効果的。ということが分かりました。来年度の生産試験時にはこれを実行し、今年度以上の生産結果を残したいと思います。

（栽培漁業センター 野元）